

第 48 回名古屋春栄会
演目のあらまし

平成 26 年 8 月 3 日

名古屋春栄会事務局

目 次

花筐（はながたみ）	1
小袖曾我（こそでそが）	2
海人（あま）	3
氷室（ひむろ）	4
清経（きよつね）	5
佐保山（さほやま）	6
鶺ノ段（うのだん）〔鶺飼（うかい）〕	7
杜若（かきつばた）	8
放下僧（ほうかそう）	9
弓八幡（ゆみやわた）	10
清経（きよつね）	10
黒塚（くろつか）	11
佐保山（さほやま）	12
石橋（しゃっきょう）	13
蝉丸（せみまる）	14
胡蝶（こちょう）	15
〔能のミ二知識	16〕

このリーフレットは、第48回名古屋春栄会の演目を解説したものです。
演目の記載順は、番組の順です。
詞章については、金春流の謡本から転載しました。

花筐（はながたみ）

【分 類】四番目物（狂女物） ＊カケリ、イロエ

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：照日の前（面・増女）、後シテ：照日の前（面・増女）

【あらすじ】（今回の連吟[クセ]の部分…下線部）

越前国（福井県）味真野にいた大迹部皇子は、皇位を継承することになり、急遽、都に上ります。皇子は寵愛していた照日ノ前のもとに使者を送り、別れの文と花筐を届けます。その文を読んだ照日ノ前は形見の花筐を抱いて悲しく我が家へ戻って行きます。

<中入>

その後、皇子は継体天皇となられ、大和国（奈良県）玉穗に都を移して、政を行っていましたが、ある日、紅葉狩に出かけられます。一方、照日ノ前は恋慕のあまり心が乱れ、侍女を伴ってはるばる都へとやって来ます。そして、たまたま御幸の行列に行き会いますが、朝臣に見苦しい狂女として払いのけられ、そのはずみで花筐を打ち落とされます。照日ノ前は、それは帝の花筐であると言って咎めます。朝臣にその理由を尋ねられ、皇子とのかなわぬ恋の悲しみを嘆き、李夫人の故事を物語り、自分の思慕の情を歌えます。天皇がその花筐を取り寄せてご覧になると、確かに見覚えのある品なので、照日ノ前に狂気を収め、もとどおり側に仕えよとの御言葉に、喜んで一緒に皇居へと向かいます。

【詞章】（今回の連吟[クセ]の部分の抜粋）

帝ふかく嘆かせたまいつつ。そのおん形を、甘泉殿の壁に写し。われも画図に立ち添いて、明け暮れ嘆きたまいしに、されどもなかなか。おん思いは増されども。もの言い交わす事なきを。深く嘆きたまえば、李少と申す太子の、幼なくまします。父帝に奏したもうよう、李夫人は元はこれ。上界の嬖妾。歌吹国の仙女なり。一旦人間に。生るるとは申せどもついに元の、仙宮に帰りぬ。泰山府君に申さく。李夫人の面影を。しばらくここに招くべしとて。九華帳の内にして、反魂香を、焚きたもう。夜更け人静まり、風すさまじく。月秋なるに、それかと思う面影の。あるかなきかにかげろえば。なおいや増しの思い草。葉末に結ぶ白露の。手にも溜まらで程もなく、ただ徒らに消えぬれば。縹緲悠揚としてはまた尋ねべき方なし。悲っきのあまりに、李夫人の住み慣れし。甘泉殿を立ち去らず。空しき床をうち払い。古き衾古き枕、ひとり袂を片敷き。

小袖曾我（こそでそが）

【分類】四番目物（現在物） *男舞

【作者】不詳

【主人公】シテ：曾我十郎祐成（直面）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

曾我十郎と五郎の兄弟は、源頼朝が富士の裾野で巻狩を行うので、この機会に親の敵工藤祐経を討とうと決心します。そうして、それとなく暇乞いをするため、また、五郎の勘当の許しも得ておこうと、母のもとを訪れます。まず、十郎が案内を求めると、母は喜んで迎え入れますが、五郎には出家になれという母の命にそむいたというので怒って会おうとしません。十郎はこのたび兄弟そろって御狩に出ようとしたのに、弟を許してくださらないのは、私の身をも思ってくださいらないことになるのです。また、五郎は箱根にいた間母上のことを思い、亡き父の回向に心を尽くしていたのですと、いろいろと弟のためにとりなし、母に怨みを述べて、弟と共に立ち去ろうとします。すると兄弟の心が通じ、母もようやく五郎の勘当を許します。二人は喜びの酒を酌み交わし、共に立って舞い、これが親子最後の対面かと名残もつきませんが、狩場に遅れてはならぬと、母に別れのあいさつをして、勇んで出立します。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

このほど時致が。このほど時致が。尽す心に引きかえて。今はいつしか思い子の。母の情ありがたや。あまりの嬉しさに祐成。お酌に立ちてとりどり。時致とともに。祝言を。謡うこえ。高き名を雲居にあげて富士の嶺の。雪をめぐらす。舞のかざし。
(いかに面面一さし舞い候え。畏って候。雪をめぐらす。舞のかざし。)

<男舞>

舞のかざしのその隙に。舞のかざしのその隙に。兄弟目をひき。これや限りの親子の契りと。思えば涙も尽きせぬ名残。牡鹿の狩場に遅参やあらんと。暇申して帰る山の。富士野の御狩の折を得て。年来の敵。本望を遂げんと。互に思う瞋恚の焰。胸の煙を富士おろしに。晴らして月を清見が関に。終にはその名をとめなば兄弟。親孝行の。ためしにならん。嬉しきよ。

海人（あま）

【分類】初・五番目物（略脇能物＝女菩薩物） ＊早舞

【作者】不詳

【主人公】前シテ：海人（面：曲見）、後シテ：龍女（面：泥眼）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

房前大臣（藤原房前）は讃岐国（香川県）の志度の浦で亡くなったという母の追善のため、従者と供人を伴って、はるばる志度の浦までやって来ます。すると、一人の海人が現れます。従者が、海人に水底に映る月を見たいので、梅松布〔みるめ〕を刈るように命ずると、海人は昔も、宝の珠を海底から取り上げるためにもぐったことがあると言います。それを聞いた従者は、その話をくわしく語らせます。

『昔、唐土から興福寺に三種の宝が贈られたが、そのうち面向不背の珠だけが、この浦の沖で龍宮に取られてしまった。藤原淡海公（藤原不比等）はそのことを深く惜しまれ、身をやつしてこの浦に下り、海人乙女と契りを交わし、その玉を取り返してくれるように頼みます。海人は淡海公の子をもうけました。その子が今の房前大臣。』

これを聞いた房前大臣は、それは自分のことだと名乗り、海人はさらに話を続けます。

『海人は、我が子を淡海公の後継ぎにする約束と交換に、千尋の綱を腰に結わえ、海に潜ります。そして、見事に珠を取り返すのですが、龍神の激しい抵抗に、自分の乳の下を掻き切って、そこに珠を隠します。流れ出る血潮に龍神がたじろぐうちに、息も絶え絶えになりながら海人は帰ってきたものの、息を引き取ります。』

語り終えると、自分こそ、その海人の亡霊であると明かし、海中に姿を消します。

《中入》

房前大臣は、浦の者からも珠取りの次第を聞き、亡き母の残した手紙を読み、十三回忌の追善供養を営みます。読経のうちに、亡霊は龍女の姿で現れ、法華経の功德で成仏できたと喜び、舞を力強く、美しく舞います。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

あら有難の御弔やな。この御経に引かれて。五逆の達多は天王記別を蒙り。八才の龍女は南方。無垢世界に生をうく。なおなお轉読。し給うべし。深達罪福相。遍照於十方。微妙浄法身具相。三十二。以。八十種好。用莊嚴法身。天人所戴仰。龍神咸恭敬。あら有難の御経やな。

<早舞>

今この経の徳用にて。今この経の徳用にて。天龍八部。人與非人。皆遙見皮。龍女成佛。さてこそ讃州志渡寺と号し。毎年八講。朝暮の勤行。佛法繁昌の靈地となるも。この孝養と。うけたまわる。

氷室（ひむろ）

【分 類】初番目物（協能） ＊舞働

【作 者】不詳

【主人公】前シテ：老人（面・尉面）、後シテ：氷室明神（面・小べしみ）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

亀山院の臣下が従者を連れて、丹後国（京都府）九世戸から都に帰る途中に、丹波路の氷室山を通りかかります。すると老人が連れのものと共に氷室山の景色について話しています。臣下の求めに応じて、老人は氷室の起源やその場所を教え、氷室の供御の威徳や御調物としての氷のすばらしさを語ります。さらに、氷室守護の神事を見るように勧めて氷室の中に消えてしまいます。

<中入>

氷室明神の社人が仲間と共に雪乞いをして雪を丸め、氷室明神に納めます。すると、天女が現れ舞をまい始めます。また、老人の消えた氷室の中から氷室明神が姿を現します。氷室明神は氷とその供御調物を守護し、祝福します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

かしこき君のみつぎなれや。かしこき君のみつぎなれや。波を治むるも氷。水をし
ずむるも氷の。日に添い月に行き。年を待ちたる氷のものの備え。備え給えや。備
え給えと采女の舞の。雪をめぐらす小忌衣の。袂に添えて。薄氷を。碎くな碎くな。
とかすなとかすなと氷室の神は。氷を守護し。日影を隔て。寒水をそそぎ。清風を
吹かして。花の都へ雪をわけ。雲をしのぎて北山の。すわや都も見えたり見えたり。
急げや急げ氷のものを。備うる所も愛宕の郡。捧ぐる供御も日の本の君に。みつぎ
ものこそ。めでたけれ。

清経（きよつね）

【分 類】二番目物（修羅物＝公達物）

【作 者】世阿弥

【主人公】シテ：平清経（面・中将）

【あらすじ】（今回の仕舞[キリ]の部分…下線部）

平清経の家臣、淡津三郎はひそかに一人で九州から都へ戻って来ます。清経は、平家一門と共に幼帝を奉じて都落ちし、西国へと逃れますが、敗戦につぐ敗戦に、前途を絶望して、豊前国（福岡県）柳ヶ浦で、船から身を投げて果ててしまいます。三郎は、その形見の黒髪を、清経の妻に届けるために、戻って来たのです。その話を聞いた妻は、せめて討ち死にするか病死ならともかく、自分を残して自殺するとは、あんまりだと嘆き悲しみます。そして形見の黒髪を見るに忍びず、涙ながらに床につくと、夢の中に清経の霊が現れ、妻に呼びかけます。妻は嬉しくもあるが、再び生きて姿を見せてくれなかったことを恨みます。清経は、都を落ちた平家一門が、筑紫での戦にも敗れ、願をかけた宇佐八幡の神からも見放されたいきさつ、敗戦の恐ろしさ、不安、心細さを話して聞かせ、望みを失って月の美しい夜ふけ、西海の船上で横笛を吹き、今様を謡って入水したことを物語って、妻を納得させようとし、続いて修羅道の苦しみを見せませんが、実は入水に際して十念を唱えた功德で成仏し得たと述べ、消えてゆきます。

【詞章】（仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

きて修羅道におちこちの。立つ木は敵雨は矢先。月は清剣山は鉄城。雲の旗手をついて。驕慢の剣をそろえて。じゃけんのまなこの光。愛欲とんいちつうげん道場。無明も法性も。乱るるかたき。打つは波引くはうしお。これまでなりやまことは最後の十念乱れぬみ法の舟に。頼みしままに疑いもなく。げにも心は清経が。げにも心は清経が。仏果を得しこそ有難けれ。

佐保山（さおやま）

【分 類】 初番目物（脇能＝女神体物） ＊神舞

【作 者】 金春禅竹

【主人公】 前シテ：里女（面・増女）、後シテ：佐保山姫（面・同じ）

【あらすじ】（今回の仕舞の部分…下線部）

藤原俊成が春日神社の参詣し、四方の景色を眺めていると、佐保山の上に白雲のように見えるものがあり、不審に思い佐保山に登ってみます。するとそこでは多くの里の女たちが衣をさらしていました。そのいわれを尋ねると、これは人間の織った衣ではなく、古今和歌集に「裁ち縫わぬ 衣着し人も なきものを なに山姫の布さらすらむ」と詠まれた衣なのだと言います。女はさらに春を司る佐保山姫のもたらす霞もこの衣のことであり、日陰も春日明神の慈悲万行の神徳だと述べ、月の夜遊を見せましようと言って、姿を消してしまいます。

<中入>

その夜、一行が木陰で休んでいると、音楽が聞こえ、佐保山姫が現れ、舞を舞います。

【詞章】（今回の仕舞の部分の抜粋）

こや佐保姫のきよ神楽。時の鼓のかずかずに。神歌の一ふし。さをの歌とや言いてまし。それは遊女の謡なる。声も妙えなり天乙女。あまの探女がいにしえを。思ひ出づるや。ひさかたの。月の御舟のみなれ棹。山姫の袖。返す霞のうす衣。たち縫わねども白糸の。くる春なれや永き日に。雨土くれを動かさで。世を守る佐保姫の。めでたきためしなるべしや。めでたきためし。なるべし。

鵜ノ段（うのだん）〔鵜飼（うかい）〕

【分 類】五番目物（鬼物＝鬼神物） ＊カケリ

【作 者】榎並左衛門五郎原作、世阿弥改作

【主人公】前シテ：鵜使いの老人（面・三光尉）、後シテ：閻魔王（面・小癡見）

【あらすじ】（『鵜ノ段』の部分…下線部）

安房国（千葉県）の清澄の僧が、甲斐国（山梨県）への行脚を志し、途中、石和川のほとりに着きます。その土地の人に、一夜の宿を頼みますが、旅の者に宿を貸すことは禁制だと断られます。その代わりに、川辺の御堂を教えられ、そこに泊まることにします。するとそこに一人の老人が鵜を休めるために立ち寄ります。僧が、老人なのにいつまでも殺生するのはやめて、他の職業についたらと意見をすると、老人は、自分は若い時からこの仕事で生計を立ててきたので、今さらやめるわけにはいかないと答えます。従僧が、二、三年前にこの地を訪れた時、このような老人に会い、もてなしを受けたと話すと、老人はその鵜使いは禁漁を犯したため殺されたと語り、実は自分がその亡霊だと明かします。僧のすすめで亡者は罪業消滅のため鵜飼のさまを見せて消えてゆきます。

<中入>

僧たちはやって来た先刻の土地の者からも、密漁をして殺された男の話を聞き、先ほどの老人こそ鵜使いの化身であったと信じ、法華經の文句を川辺の石に一字ずつ書いて川に沈めて回向します。すると地獄の鬼が現れて、かの鵜使いは地獄へ墮ちるはずであったが、生前、僧を接待した功德と、法華經の効力によって救われ、極楽へ送ることになったと告げ、法華經のありがたさをたたえます。

【詞章】（『鵜ノ段』の部分の抜粋）

湿る松明振り立てて。藤の衣の玉襷。鵜籠を開き取り出し。島つ巢おろし荒鵜ども。
この川波に。ぱっと。放せば。おもしろの有様や。おもしろの有様や。底にも見ゆる篝火に。驚く魚を追い回し。潜きあげ掬いあげ。隙なく魚を食う時は。罪も報いも後の世も。忘れ果てて面白や。みなぎる水の淀ならば。生け簀の鯉やのぼらん。玉島川にあらねども。小鮎さ走るせぜらぎに。かだみて魚はよもためじ。不思議やな篝火の。燃えても影の暗くなるは。思い出でたり。月になりぬる悲しさよ。鵜舟のかがり影消えて。闇路に迷うこの身の。名残をしきを如何にせん。名残をしきを。如何にせん。

杜若（かきつばた）

【分類】 三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊イロエ／序ノ舞

【作者】 金春禅竹

【主人公】 シテ：里の女＝杜若の精の化身（面：小面）

【あらすじ】（今回の舞囃子の部分…下線部）

旅僧が都から東国へと赴き、三河国（愛知県）にやって来ます。そこは杜若の花が今を盛りと咲き誇っているのです。僧が花に見とれていると、一人の里の女がやって来ます。そして、ここは八橋という古歌にも詠まれた杜若の名所だと教え、在原業平が「かきつばた」の五文字を各句の頭において、「唐衣 着つつ馴れにし 妻しあれば はるばる来ぬる 旅をしぞ思ふ」と詠んだ事を語り、杜若は業平の形見の花だと思ひます。その上、僧を自分の庵に案内します。やがて、初冠と唐衣を着て現れるので、僧が驚いて尋ねると自分は杜若の精であると明かします。そして、伊勢物語に描かれた業平の数々の物語や、業平が歌舞菩薩の生まれ変わりである事などを語り、舞をまい、草木も成仏できることを喜びつつ消えて行きます。

【詞章】（今回の舞囃子の部分の抜粋）

くらきに行かぬ有明の。光あまねき月やあらぬ。はるや昔の春ならぬ。わが身ひとつは。もとの身にして。本覚真如の身をわけ。陰陽の神といわれしも。ただ業平の事ぞかし。かように申す物語うたがわせたまうな旅びと。はるばる来ぬるから衣。きつつや舞を。かなずらん。花前に蝶まう。ふんふんたるゆき。柳上に鶯とぶ。へんぺんたるきん。

<序ノ舞>

植えおきし。昔の宿の。かきつばた。色ばかりこそ昔なりけれ。色ばかりこそ昔なりけれ。色ばかりこそ。昔男の名をとめし。花橋の。匂いうつる。あやめの鬘の。色はいづれぞ。似たりや似たり。かきつばた花あやめ。梢に鳴くは。蟬の唐衣の。袖白妙の卵の花の雪の。夜もしらしらと。明くるしののめの。あき紫の。杜若の。花も悟りの。心ひらけて。すわや今こそ草木国土。すはや今こそ。草木国土。悉皆成仏のみ法を得てこそ。帰りけれ。

放下僧（ほうかそう）

【分類】四番目物（現在物） *羯鼓〔かっこ〕

【作者】不詳

【主人公】前シテ：禅僧・小次郎の兄（直面）、後シテ：小次郎の兄（直面）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

下野国（栃木県）の住人、牧野左衛門は、相模国（神奈川県）の利根信俊と口論の末、打ち果たされてしまいます。その子の牧野小次郎は、父の無念を思い、信俊を敵とつけ狙いますが、相手は大勢、こちらは唯一人で思うにまかせません。そこで、幼少から出家している兄に力を求めるべく、禅学修行中の学寮へ訪ねて行きます。そして一緒に仇討に出立しようと促しますが、兄は出家の身を思い、ためらいます。小次郎は、親の敵を打たぬのは不孝であるといい、母を殺した虎をねらって、百日、野に出、虎と見誤って大石を射たが、一心が通じて矢は突き立ち、血が流れた、という中国の故事を物語ります。兄も弟の熱意に動かされ、仇討に同意します。そして二人は談合の末、敵に近寄る方便として、当時流行の放下僧と放下に変装して、故郷に名残りを惜しみつつ出発します。

<中入>

一方、利根信俊は夢見が悪いため、瀬戸の三島神社への参詣を志します。道中、放下が来るといので、従者が旅の徒然にと呼び寄せます。小次郎兄弟は、浮雲・流水と名乗り、信俊に近づきます。そして、兄は自分の持つ団扇のいわれを、弟も携えた弓矢のことを面白く説きます。つづいて禅問答に興じ、曲舞や羯鼓、小歌などさまざまな芸を見せていきます。そして、相手の油断を見すまし、兄弟ともども斬りかかって、首尾よく本望をとげます。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

由良の港の釣り舟は。魚を得て釜を捨つ。これを見かれを聞く時は。峰の嵐や谷の声。夕べの煙朝霞。みなこれ。三界唯心の。ことわりなりとおぼしめし心を悟り。たまえや。風にまかする浮雲の。種と心や。なりぬらん。

<羯鼓>

おもしろの。花の都や。筆に書くとも及ばじ。東には。祇園清水落ちくる滝の。音羽の嵐に地主の桜はちりぢり。西は法輪。嵯峨のおん寺廻らば廻れ。水車の輪の。井堰井関の川波。川柳は。水にもまるるふくら雀は。竹にもまるる野辺のすすきは。風にもまるる都の牛は。車にもまるる茶臼は引き木挽にもまるる。げにまこと。忘れたりとよこきりこは放下にもまるるこきりこのふたつの竹の。代代を重ねてうち治めたるみ代かな。

弓八幡（ゆみやわた）

【分類】 初番目物（脇能） *神舞

【作者】 世阿弥

【主人公】 前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：高良ノ神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

後宇多院に仕える臣下が、如月初卯の男山八幡宮（石清水八幡宮）の如月初卯の神事に陪従として参詣するよう命じられ、八幡宮に向います。やがて八幡宮に着き、参詣しようとする、一人の男を伴い、錦の袋に納めた弓を持った老翁がいます。不思議に思って尋ねると、老翁は「私は長年この八幡宮に仕えているもので、桑の弓を君に捧げようと思い、あなたを待っていたのです」と答えます。そして、桑の弓を袋に納めたまま君に捧げるいわれなどを詳しく語ります。さらに、八幡宮のいわれを語り、実は自分は高良の神で、君を守るためにここに現れたと言い、かき消すように消えてしまいます。

<中入>

臣下が神託を伝えるため、都に帰ろうとすると、どこからか音楽が聞こえ、良い香が薫ってきます。するとそこへ、高良〔かわら〕の神がその姿を現し、舞を舞い、御代を祝い、八幡宮の神徳を讃えます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

君を守りの御誓い。もとより定めある上に。殊にこの君の神徳。天下一統と守るなり。げにげに神代今の代の。しるしの箱の明らかに。この山上に宮居せし。神の昔は。ひさかたの。月の桂の男山。さやけき影は所から。畜類鳥類鳩吹く松の風までも。皆神体と現れ。げにたのもしき神ごころ。示現大菩薩八幡の。神徳ぞ豊かなりける。神徳ぞ豊か。なりける。

清経（きよつね）

5ページ参照。

黒塚（くろつか）

【分類】五番目物（鬼女物） ＊祈り

【作者】不詳

【主人公】前シテ：里女（面・曲見）、後シテ：鬼女（面・般若）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

紀州（和歌山県）熊野の山伏、阿闍梨祐慶の一行は、諸国行脚の途中、奥州（福島県）安達原に着きます。日が暮れたので、火の光をたよりに野中に一軒の庵を見つけます。一夜の宿を乞うと主の女は一度は断りますが、是非にといわれ招き入れません。山伏が見馴れぬ杵かせ輪に興味を持つので、女は糸尽くしの唄を謡いながらそれで糸を繰る様を見せます。やがて女は夜も更けたので、もてなしの焚火をするために、山に木を取りにゆくから、帰るまで閨の内を見てなといいい置いて出かけます。

<中入>

能力は余りくどく閨の内を見てはならぬといったので、かえって不審に思い、祐慶に許可を求めるが許されません。能力は山伏達の寝入った隙を見て、閨をのぞくと、そこには人の死骸が山と積んであるので、びっくりし、これこそ鬼の住家だと祐慶に告げます。一行は驚いて逃げ出すと、先程の女が鬼女の本性を現し、約束を破って閨の内を見たことを非難し、恨み、襲いかかって来ます。山伏達は必死に祈るので、鬼女は遂に祈り伏せられ、恨みの声を残して、夜嵐とともに消え失せます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

今まではさしもげに。怒りをなしつる鬼女なるが。たちまちに弱りはてて。天地に身をつづめ眼くらみ。足もとはよろよろと。ただよいめぐる安達が原の。黒塚に隠れ住みしも、あさまになりぬる浅ましや恥かしのわが姿やと。いう声はなおもの凄じく。いう声はなお。すさまじき夜嵐の音に。たちまぎれ失せにけり、音にたちまぎれ失せにけり。

佐保山（さおやま）

【分 類】 初番目物（脇能＝女神体物） ＊神舞

【作 者】 金春禅竹

【主人公】 前シテ：里女（面・増女）、後シテ：佐保山姫（面・同じ）

【あらすじ】（今回の独吟の部分…下線部）

藤原俊成が春日神社の参詣し、四方の景色を眺めていると、佐保山の上に白雲のように見えるものがあり、不審に思い佐保山に登ってみます。するとそこでは多くの里の女たちが衣をさらしていました。そのいわれを尋ねると、これは人間の織った衣ではなく、古今和歌集に「裁ち縫わぬ 衣着し人も なきものを なに山姫の布さらすらむ」と詠まれた衣なのだと言います。女はさらに春を司る佐保山姫のもたらす霞もこの衣のことであり、日陰も春日明神の慈悲万行の神徳だと述べ、月の夜遊を見せましようと言って、姿を消してしまいます。

<中入>

その夜、一行が木陰で休んでいると、音楽が聞こえ、佐保山姫が現れ、舞を舞います。

【詞章】（今回の独吟の部分の抜粋）

誰がための錦なればか秋霧の。佐保の山辺を。たちかくすらんと。ながめけるもこ山の。妙なる秋の気色なり。かように治まれる四つの時。いく年どしを送りけん。花の春。紅葉の秋の夕時雨。古きを守るためしまでも。仰ぐや青丹よし奈良の世々ぞ久しき。ことさらこの山は。春の日影もよそならで。慈悲万行の神徳の。ひろき誓いの海山も。皆安全の国とかや。そもそも葦原の国つかみ。世々にあまねき誓いにも。御名はことに久方の。あまの児屋根のそのかみ。この秋津洲の主として。皇孫をいつき給いしより。八島に治まる時津風。四海にたたん波の声。万歳をよぼう三笠山。御影もさすや河竹の。佐保の山辺の春の色。万山ものどかなりけり。

石橋（しゃっきょう）

【分 類】五番目物（切能＝精霊物） *獅子

【作 者】不詳

【主人公】前シテ：童子（面・童子）、後シテ：獅子（面・獅子口）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

大江定基は出家して寂昭法師と号し、中国、インドの仏教関係の移籍を巡礼し、清涼山にやって来ます。そして石橋を渡ろうとすると、一人の童子が現れ、この石橋は千丈あまりの谷に、幅はわずか一尺にも満たないが、長さは三丈にも及ぶ石の橋で、人間が渡したのではなく、自然と出現したものであり、人が容易に渡れるものではないと止めます。そして、向いは文殊菩薩の浄土であるから、ここで待てばやがて奇瑞が現れるだろうと告げて、立ち去ります。

<中入>

待つほどもなく、獅子が石橋の上に現れ、咲き乱れた牡丹の花の間を勇壮に舞い戯れ、千秋万歳を祝います。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

簫笛琴箏篔。夕日の雲に聞えき。目前の奇特あらたなり。暫く待たせ給えや。影向の時節今いくほどに。よもあらじ。

<獅子>

獅子とらでんの舞楽のみぎん。獅子團乱旋の舞楽の砌。牡丹の花房匂いみちみち。だいきんりきんの獅子がしら。うてや囃せやばたんぼう。牡丹ぼう。黄金のずいあらわれて。花にたわむれれ枝にふしまろび。げにも上なき獅子王の勢い。なびかぬ草木もなき時なれや。万才千秋と舞いおさめ。万才千秋と舞いおさまりて。獅子の座にこそ。なおりけれ。

蝉丸（せみまる）

【分類】 四番目物（狂女物） ＊カケリ

【作者】 世阿弥

【主人公】 シテ：逆髪（面・増髪）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

延喜帝の第四皇子、蝉丸の宮は盲目の身に生まれつきました。帝は、宮の後世を助けるため、清貴に命じて、逢坂山に捨てさせられます。清貴は悲しみますが、かえって蝉丸は、過去の罪業を償わせようとの父君の慈悲なのだと、恨み嘆く態度を見せません。清貴は宣旨の通りに、蝉丸を剃髪、出家させ、簞、笠、杖をおいて去ってゆきます。一人になると、蝉丸もさすがに淋しく、琵琶を抱いて泣き伏します。やがて博雅三位がやって来て、蝉丸を慰め、小屋を作りその中へ助け入れて、また見舞いに来ると言って、帰ってゆきます。蝉丸の姉宮逆髪は、その名の如く頭の髪が上に向かって逆さまに生え、そのため狂乱となっています。彼女は御所をさまよ
い出て、いつしか逢坂山へとやって来ます。そしてふと気がつく、近くの藁屋の内から妙なる琵琶の音が聞こえて来ます。不審に思って立ち寄ると、中から声をかけたのは、弟宮でした。姉弟は、互いに手をとりあって身の不運を嘆き悲しみ、また慰め合います。やがて、名残りを惜しみつつも、姉宮はいずこともなく去り、弟宮は見えぬ目で見送ります。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

花の都を立ち出でて。花の都を立ち出でて。うきねに鳴くか加茂川や。すえ白川を
うちわたり。粟田口にも着しかば。今は誰をか松坂や。関のこなたと思いに。あ
とになるや音羽山の。名残惜しの都や。松虫鈴虫きりぎりすの。鳴くや夕陰の山科
の。里人もとがむなよ。狂女なれど心は。清滝川と知るべし。逢坂の関の清水に影
見えて。今やひくらん望月の。駒の歩みも近づくか。水もはしり井の影見れば。わ
れながらあきましや。髪はおどろを頂き。眉墨も乱れ黒みて。げに逆髪の影うつる。
水を鏡という波の。うつつなのわが姿や。

胡蝶（こちょう）

【分 類】三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊中ノ舞

【作 者】観世小次郎信光

【主人公】前シテ：都の女（面・小面または増女）、後シテ：胡蝶の精（面・同じ）

【あらすじ】（今回の仕舞の部分…下線部）

吉野の奥に住む僧が、花の都を見物しようと上京し、一条大宮のあたりにやって来ます。そこに由緒ありげな古宮があり、その御殿の階段の下に梅が今を盛りと美しく咲いています。僧が立ち寄って眺めていると、そこへ人気のなさそうな家の中から、一人の女性が現れ声をかけて来ます。そして、この御殿や梅の木について語ってくれます。僧は喜んで、女の素性を問いただすと、実は自分は人間ではなく胡蝶の精だと明かします。そして、春、夏、秋と草木の花かがりし、法華経の功德を受けたいのですね、と、莊子が夢で胡蝶になったという故事や、光源氏が童に胡蝶の舞をまわせ御船遊びをなさったことなどを語り、もう一度、御僧の夢の中でお会いしましょうと夕空に消えてゆきます。

<中入>

僧は所の人からも、この古宮や胡蝶の話聞き、花の下陰に仮寝をしていると、その夢に胡蝶の精が現れて、法華妙典の功力によって、梅花とも縁を得たことを喜び、花に飛びかう胡蝶の舞をみせ、やがて春の夜の明けゆく空に、霞にまぎれて去ってゆきます。

【詞章】（今回の仕舞の部分の抜粋）

四季おりおりの花ざかり。四季おりおりの花盛り。梢に心をかけまくも。かしこき宮の所から。しめの内野もほど近く。野花黄鳥春風を領し。花前に蝶舞うふんぶんたる。雪をめぐらす舞の袖。返すがえすも。おもしろや。春夏秋の。花もつきて。春夏秋の。花もつきて。霜をおびたる白菊の。花折りのこす枝をめぐり。めぐりめぐるや小車の。法にひかれて仏果に至る。胡蝶も歌舞の菩薩の舞の。姿を残すや春の夜の。あけゆく雲に羽根うちかわし。あけゆく雲に。羽根うちかわして。霞にまぎれて、うせにけり。

能のミニ知識

★能の分類

五番立て…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといえます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

○三番目物(鬘[かつら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

★能の楽器

囃子方[はやしかた]…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛(能管):竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓: 台に据えて、二本のバチで打ちます。

★略式の演能

素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡う。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態。

独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するもの。演者は紋付袴姿。

連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するもの。演者は紋付袴姿。

仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞う(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞う。仕舞扇を用いるが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いない。シテ一人で演じるのが普通だが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものもある。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされる。

舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うもの。平均して10~20分程度の長さになる。長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略する。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となったが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされている。

袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるもの。

半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるもの。

独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもの。

一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するもの。

一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合がある。

素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるもの。

番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるもの。

★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。

中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。

「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。

精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。

「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。

働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>